

## 大学と附属学校を往還する実践的な教育実習システムの構築 —教育実習のExit Standardsの作成を通して—

◎鈴木直樹（東京学芸大学健康スポーツ科学講座体育科教育学分野）

○浅井百合香（東京学芸大学附属世田谷中学校）

松田恵示（東京学芸大学健康スポーツ科学講座体育科教育学分野）

鈴木秀人（東京学芸大学健康スポーツ科学講座体育科教育学分野）

鈴木 聡（東京学芸大学健康スポーツ科学講座体育科教育学分野）

笠松具晃（東京学芸大学附属小金井小学校）

上野佳代（東京学芸大学附属小金井中学校）

田島宏一（東京学芸大学附属大泉小学校）

深澤裕美子（東京学芸大学附属国際中等教育学校）

堀口純平（東京学芸大学附属竹早小学校）

大熊誠二（東京学芸大学附属竹早中学校）

長坂祐哉（東京学芸大学附属世田谷小学校）

佐藤健太（東京学芸大学附属高等学校：平成 24 年度のみ）

齋藤祐一（東京学芸大学附属高等学校：平成 25 年度のみ）

代表者連絡先：nsuzuki@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 Exit Standards, 教育実習, 教員養成, 実践的力量, 反省的实践

### 1 はじめに

教師には、「高い専門性」と「学び続ける姿勢」が求められている。そこで「子ども理解/自己理解」を前提としながら、「教科内容に関する知識」と「教授方法に関わる知識」を有機的に関連させて教師の資質能力を高め、指導を支える専門的な力量と学びのパスpekティブを形成していく必要がある。ところが、近年、附属学校との連携は増加しつつあるものの、教育学部の中核ともいえる「教育実習」は、附属校任せであるのが現状といえる。逆に、附属校の教員にとっても大学での学びがブラックボックスになっている。そのため、表向きは系統的なカリキュラムとして教育実習が位置づいていたとしても、実際には質的に体系的な教員養成プログラムとなっていない可能性がある。

一方で、東京学芸大学の教育実習は、3年次に附属学校で基礎実習あるいは観察実習を行い、その経験を踏まえて4年次に公立校で応用実習を行うように組織されている。このように、時期をあけて二度に渡って教育実習をすることによって、反省的に実践を振り返り、実践的力量を効果的に育成することができると考えられる。すなわち、体験して終わりというような教育実習ではなく、経験によって教師としての資質能力を高めていく契機を有しているといえよう。このような特徴を生かすためには、大学での学びと教育実習での学びが連動することが不可欠である。すなわち、大学で得た「教科内容に関する専門的知識」や「教授方法に関する専門的知識」が教育実習において附属校の教員や児童生徒とのかかわりの中で、活用される知恵となることが必要である。そのためには、大学と附属学校間で、教員養成に対する共通理解が不可欠であり、教育実習を終了した際の学生に期待するスタンダードを共有し、指導する必要があるといえる。

そこで、このような教育実習で育みたい学生の姿を大学と附属学校の教員が協働し、先行研究や先行する実践も詳細に調査しながら、「学芸大学教育実習 Exit Standards (体育版)」の作成を核としながら、学芸大学の特徴を生かした教育実習システムの構築を本プロジェクトの目的としている。

## 2 本プロジェクトの内容

### 1) 教育実習に関する調査

#### (1) 調査の目的

教育実習を経験した東京学芸大学保健体育選修及び生涯スポーツ専攻が、実習及び大学での学びをどのように捉えているかを把握するために、学生の意識について検討することを意図して調査を計画した。2年間継続して調査を行い、学生の変容や学年による相違の有無についても検討した。学生が教育実習で何を重視し、どこに問題を感じているかを明らかにすることを目的とした。

#### (2) 方法

① 対象者及び属性、サンプル数右の通り

② 実施時期

平成 24 年および平成 25 年の 11～12 月

③ アンケートの構成

a. フェイスシート項目

性別、学年、配当学年、授業回数（全体・そのうちの体育科授業）、示範授業の参観回数によって構成した。

b. 教育実習で学んだことに関する項目

47 項目で構成される質問紙調査項目を作成した。

④ 分析方法

学生に意識を把握するための構成概念を設定し、その妥当性と信頼性を検討するため、47 項目について因子分析（主因子法・Promax 斜交回転）を行い、Cronbach の  $\alpha$  係数を用いた信頼性分析を行った。因子ごとに下位尺度の合計得点の平均値を求め、選修・専攻別、学年別、性別等を変数とした一元配置分散分析を行った。データ分析には、IBM SPSS Statistics21 を使用した。本報告では、代表的な結果のみを示す。

#### (3) 結果と考察

① 因子分析結果

平均値、標準偏差を算出後に天井効果が見られた項目及び十分な因子負荷量を示さなかった項目を分析から除外し因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子相関係数は表 2 の通りである。回転前の 5 因子で項目の全分散を説明する割合は 46.39%であった。

②抽出された因子について

第 1 因子は 6 項目で構成されており、「興味喚起・雰囲気作り」に関する因子と命名した。第 2 因子は 8 項目で構成されており、「授業作り・教材作り」に関する因子と命名した。第 3 因子は 3 項目で構成されており、「児童生徒との関係構築」に関する因子とした。第 4 因子は 4 項目で構成されており、「運動技術指導の重要性」因子と命名した。第 5 因子は 3 項目で構成されており、「大学での学びの重要性活用」因子と命名した。内的整合性を検討するために  $\alpha$  計数を算出したところ、いずれも高い数値であり信頼性があると判断した。

③分散分析の結果と考察

因子ごとに平均値を求め、学生の属性によって差が見られるかどうかを検討した。特徴的なものについてのみ、報告する。

a. 運動技術指導重要性和類・学年

表1 対象者の属性と人数（人）

| 類・学年       | 合計  | 男子  | 女子  |
|------------|-----|-----|-----|
| 24年度 A類3年生 | 38  | 21  | 17  |
| 24年度 B類3年生 | 24  | 13  | 11  |
| 24年度 A類4年生 | 35  | 21  | 14  |
| 24年度 B類4年生 | 9   | 9   | 0   |
| 24年度 G類4年生 | 20  | 16  | 4   |
| 25年度 A類3年生 | 37  | 16  | 21  |
| 25年度 B類3年生 | 21  | 14  | 7   |
| 25年度 G類3年生 | 11  | 6   | 5   |
| 25年度 A類4年生 | 37  | 19  | 18  |
| 25年度 B類4年生 | 20  | 14  | 6   |
| 25年度 G類4年生 | 23  | 16  | 7   |
| 合計         | 275 | 165 | 110 |

表2 学生が捉える「教育実習で学んだこと」の因子分析結果

|                                 | I   | II | III | IV | V |
|---------------------------------|-----|----|-----|----|---|
| <b>I 興味喚起・雰囲気作り</b>             |     |    |     |    |   |
| 授業では、明るい雰囲気作りが大事だ。              | .67 |    |     |    |   |
| 授業をするには、場づくりが大切である。             | .66 |    |     |    |   |
| 授業では、意欲を喚起する工夫が大事だ。             | .65 |    |     |    |   |
| 児童や生徒には笑顔で接することが大事だ。            | .65 |    |     |    |   |
| 授業では、児童や生徒をほめることが大事だ。           | .56 |    |     |    |   |
| 授業では、授業中における児童や生徒の姿勢や態度が大事だ。    | .49 |    |     |    |   |
| 教育実習では、児童や生徒の興味を引く授業になるように工夫した。 | .48 |    |     |    |   |
| 教育実習では、児童や生徒との関わり方について学べた。      | .47 |    |     |    |   |
| 児童や生徒が関わり合う授業を目指した。             | .43 |    |     |    |   |
| 授業において、雰囲気作りを力を入れた。             | .42 |    |     |    |   |
| <b>II 授業作り・教材作り</b>             |     |    |     |    |   |
| 教育実習では、授業作りの方法について学べた。          | .53 |    |     |    |   |
| 教育実習では、指導案の書き方について学べた。          | .52 |    |     |    |   |
| 教育実習では、体育科の指導方法について学べた。         | .49 |    |     |    |   |
| 教育実習では、体育科の教科内容について学べた。         | .48 |    |     |    |   |
| 教育実習では、教材研究について学べた。             | .47 |    |     |    |   |
| 大学では、授業作りの指導をもっとすべきである。         | .45 |    |     |    |   |
| 大学では、指導方法を学ぶべきである。              | .44 |    |     |    |   |
| 教育実習では、指導技術について学べた。             | .43 |    |     |    |   |
| <b>III 児童生徒との関係構築</b>           |     |    |     |    |   |
| 大学では、児童や生徒との関わり方について学ぶべきである。    | .70 |    |     |    |   |
| 大学では、児童や生徒の心理について学ぶべきである。       | .65 |    |     |    |   |
| 大学では、コミュニケーションスキルについて学ぶべきである。   | .57 |    |     |    |   |
| <b>IV 運動技術指導の重要性</b>            |     |    |     |    |   |
| 授業では、「できる」ことを目指すことが大事だ。         | .68 |    |     |    |   |
| 児童や生徒ができるようになる指導が大切だ。           | .59 |    |     |    |   |
| 授業では、時間を守ることが大事だ。               | .47 |    |     |    |   |
| 授業において、技術指導に力を入れた。              | .43 |    |     |    |   |
| <b>V 大学での学びの重要性</b>             |     |    |     |    |   |
| 大学での理論的な学びは、教育実習に生きていると思う。      | .85 |    |     |    |   |
| 大学では、授業作りの基礎となる理論を学ぶべきである。      | .46 |    |     |    |   |
| 大学での実技的な学びは、教育実習に生きていると思う。      | .45 |    |     |    |   |

因子間相関

|                | I | II  | III | IV  | V   |
|----------------|---|-----|-----|-----|-----|
| I 興味喚起・雰囲気作り   | - | .49 | .27 | .27 | .29 |
| II 授業作り・教材作り   |   | -   | .31 | .28 | .32 |
| III 児童生徒との関係構築 |   |     | -   | .42 | .17 |
| IV 運動技術指導の重要性  |   |     |     | -   | .33 |
| V 大学での学びの重要性   |   |     |     |     | -   |

H24年度A類3年生の値は、H24年度A類4年生、H25年度A類4年生、H25年度B類3年生及び4年生、H25年G類4年生と比較して低く、それぞれ5%水準で有意差があった。A類の3年生の時期は、技術の向上をそれほど重要な事として捉えていない見方ができる。またH25年度A類4年(同一の学生)と比較すると、有意差はなかったが値が上昇しており、1年間でその意識が高まったという見方ができる。H25年度のA類3年生もそれほど高くないため、その傾向があるのかもしれない。

#### b. 興味関心・雰囲気作りと教職志望

授業においては、児童生徒の興味関心を高め、雰囲気を作っていくことが大切であると捉える意識に関しては、教職志望の別に見たときに差が見られた。特に、小学校教員を目指す学生が教員を目指さない学生よりも意識が高く、5%水準で有意差が見られた。高校教師を目指す学生もその意識があまり高くない。

#### c. 大学の学びの重要性と性別

大学での学びが実習に生きていると感じている学生を性別で比較すると、5パーセント水準で女子学生の方が男子学生よりも高かった。他の因子は、性別における有意差はなかった。

#### d. 各因子と学年

全ての因子において、B類の学生の意識が他の学生の意識よりも高い傾向にある。また、G類は、3年生から4年生にかけて、大きく意識が高まるのがグラフから読み取れる。これは、G類の3年生は、観察実習であり、4年生で本実習を経験するとリアリティが増してそれぞれの意識が高まるのが予想される。「児童とのコミュニケーション」については、B類の学生で、3年生よりも4年生の意識が低くその差も大きい。どう解釈していくかは今後の課題としたい。

「大学での学びの重要性」については、A類とB類で差があり、B類の方が意識が高い。実際には、どのような学びを重要と捉え、何を役立たないと考えているか、内容についても今後より深く考察していきたい。

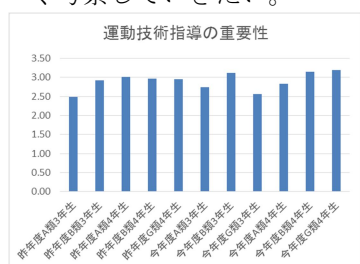


図1 運動技術指導の重要性と属性（類・学年）

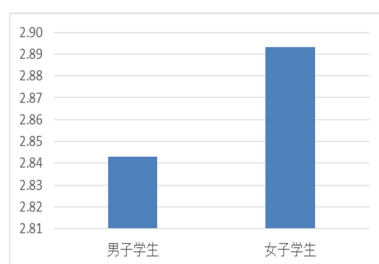


図2 興味関心・雰囲気作りと属性（教職志向）

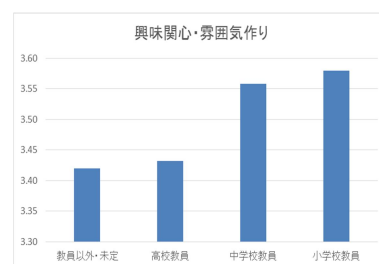


図3 大学の学びの重要性と属性（類・学年）

## 2) Exit Standards の作成の試み \*スタンダードとは…規準となる学びの姿を指す。

(1) 体育教師に求められる力量に関する検討—米国と豪州の教師スタンダードを手がかりとして—

教師の成長といった観点から体育教師に求められる力量と力量形成上の課題を明らかにするため、学部卒業レベルのスタンダードと修士卒業レベルのスタンダードが作成されている米国の体育教師スタンダードとキャリアステージごとにスタンダードが作成されている豪州の教師スタンダードを検討した。その結果、体育教師の力量は、「教科内容」「指導に関する内容」の理解に加え、「子どもに対する知識（理解）」と「教師に対する知識（理解）」が必要であることが明らかになった。また、検討した2つのスタンダードでは、現場での指導経験を含めて段階的に設定されているのに対して、日本の大学や大学院のカリキュラムでは、これを実習程度で考えており、実務経験とはつながっていない。今後は、教員養成学生と現職教員の職能プログラムを連関させて考えていく必要がある。この考えに基づいて作成されたスタンダードによって、体育教師が、学び続ける学習者となっていくであろう。

(2) Exit Standards の作成 表1を参照

## 3) 教育実習プログラムの検討

### (1) A類小学校実習

主として、附属小金井小学校と附属世田谷小学校の教育実習プログラムを比較検討したが、6月のオリエンテーション→実習期間前→実習前半→後半という流れにおいて、基本的な内容に大きな違いはなかった。

注目されたのは、世田谷小学校でのみ行われている教科別研究の場の設定である。学級での研究を主体とする小学校実習では、学級協議会では様々な視点から配当学級の授業について振り返り、それが次の指導計画を練る上で活用されるといつながりがある。それに対して、教科別研究では教科の専門性が問われることになり、その中で、実習生は大学での専門教科に関する学びを想起したり、大学の図書館で関連する専門の文献に当たったりすることを促され、学級での研

究とは異なる学びを深めることができている。

本学のA類が教科ピーク制をとっていることを考えると、今後、この教科別研究を4附属共通の実習プログラムへ組み込む意義を考える必要があるのではないだろうか。

## (2) B類保健体育科・中学高校実習

附属小金井中学校、附属世田谷中学校、附属竹早中学校、附属国際中等教育学校、附属世田谷高等学校の教育実習プログラムを検討したが、附属中等学校及び附属高校とその他3つの附属中学校のプログラムに大きな違いが見出された。

それは、実習生が授業実践を行う前に附属学校教員の授業を参観する機会の設定時期である。3つの附属中学校が実習期間前半に授業参観を行っているのに対し、附属中等学校及び高校は、各実習生が担当できる授業時数を多くするという配慮から、授業参観は実習期間前に随時附属校に実習生が向かい行うこととしていて、実習期間前半から授業実践が開始されるのである。

附属小学校も含め、実習期間前の実習生の取り組みは各自が自習として取り組む教材研究を主体としているが、ここに実習校での授業参観をどの程度までオフィシャルなプログラムとして組み込むかは、大学全体の実習プログラムとの関係にも目を配りながら、今後検討していく必要があると思われる。

## 3 研究の成果と課題

### 【成果】

- ・大学教員と附属学校教員との間で、学生指導上の共通理解を図ることができた。
- ・大学教員と附属学校教員間での連携が強化され、協働した新しい研究や実践への取り組みが生まれた。
- ・大学教員と附属学校教員の双方が自らの指導を見直す機会となり、授業や実習の改善の契機となった。

### 【課題】

- ・各附属学校で独自の取り組みがなされてきたことが明らかになり、そのよさが共有できた一方で、共通のスタンダードを設定し、それを保障する為の既存のプログラムをベースにした教育実習プログラムの開発が課題となった。このことについては、引き続き研究を深めたい。
- ・2年間の研究では、開発したスタンダードの運用に関する検証までには至らなかった。今後

|                 |        | 実習入口のスタンダード<br>(知る) * 3年春学期までに                                                                                                                                 | 基礎実習の出口スタンダード<br>(理解する)                                                                                                                                                                                         | 応用実習の出口スタンダード<br>(活用する)                                                                                                        |
|-----------------|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 実<br>践<br>面     | 指導案作成  | 単元や授業の流れ、運動の特性、指導案の構成要素(枠組み)を知り、大まかな指導案を書くことができる。                                                                                                              | 指導案の重要性や項目の意味を理解し、指導教員の支援の下、児童生徒の実態を踏まえ、授業実践に活かすことのできる指導案を作成することができる。                                                                                                                                           | 指導教員の支援がなくても、児童生徒の実態を踏まえ、ねらいを明確にし、授業実践に活かすことのできる指導案を作成することができる。                                                                |
|                 | 教材研究   | 教材づくりで大切にしなければいけないポイントを知っている。まずは、指導書や授業書を使用した教材研究を行っている。                                                                                                       | 指導教員の教材研究の方法に気づき、それに基づいて効率的かつ効果的な教材研究をしている。                                                                                                                                                                     | 子どもの実態を捉えた工夫した教材研究を行っている。                                                                                                      |
|                 | 授業観察   | 授業観察をする上での適切な視点を理解し、いくつかの観察方法を使用して教師行動や児童生徒の発話、授業中の出来事や印象の記録をとっている。また、観察しながら、単にメモをとるのではなく、授業記録として大切な部分の観察記録をしている。集合、用具の準備や片づけ、移動などマネジメントを効果的に行うための方法について知っている。 | 指導教員の授業を参観しながら、教師としての力量形成や授業改善にとって授業観察が大切であることを実感し、適切な授業観察を行いながら、活用可能なデータを収集している。                                                                                                                               | 子どもの学びに注目し、授業を観察し、子どもの学びの変化を見取ることを通して授業を語っている。                                                                                 |
|                 | マネジメント | 授業を振り返る視点を知っている。                                                                                                                                               | 指導教員が実践しているマネジメントを観察して効果的に行うための方法に気づき、自分にあった方法を使用している。                                                                                                                                                          | 状況に応じてマネジメントを効率的に行っている。                                                                                                        |
| Professionalism | 省察     | 授業を振り返る視点を知っている。                                                                                                                                               | 観察した授業や実践した授業を客観的に振り返り、教師行動や教材の改善のポイントを見出し、実践している。                                                                                                                                                              | 授業実践中や授業後に、授業の事実、児童生徒の学びの事実を通して指導状況を振り返り、改善のポイントを見出し、状況と文脈に応じて指導を修正している。                                                       |
|                 |        | 教職に対する情熱を持っている。また、どんな教師になりたいか、どんな授業を創りたいか、自身の経験や大学での学びを総括的に考えてイメージを持っている。様々な授業に関する方法や理念を学び、その方法をできるだけ児童生徒の実態から再構築して授業に臨もうとする意識を持っている。                          | 児童や生徒の実態を把握することの大切さを実感している。そのための方法を知り、児童や生徒の実態から授業を創ることの大切さを実感している。また、理想の教師像を考えて行くに当たっては、指導教員の姿を身近な教師モデルとして捉えたり、基礎実習での実践を通して自身の経験を振り返ったりしながら、自分らしさを加えている。そのことを通して、教師の「役割」の部分と人間味あふれる「素」の部分の両方の表出が大切であることを捉えている。 | 教職に対する希望を持ち、自身にはその資質があることという思いを持っている。専門性の高い教師を目指し、今までの実習における実践知と、大学で学んでいる学問知を融合させながら、現時点で「技術的熟達」を目指しつつ、「反省的実践家」になっていこうと実践している。 |

は、この研究で明らかになった成果に基づいて実践的に研究を進めていきたい。

表1. 教育実習のExit(出口) Standards